

「新潟大学脳神経外科同窓会誌」 vol.28 : 8-20, 2010年11月, 別刷

中田瑞穂先生の居室とご自宅に思うこと

生 田 房 弘

中田瑞穂先生の居室とご自宅に思うこと

生 田 房 弘

(昭和31年入局)

1. はじめに

新潟に於いて系統的に開始された「脳神経外科学」にとっても、また「新潟大学脳研究所」にとっても、生物の胎生期にも相当する、目立たない、しかし遅しく、沸々とした努力が続けられた時期があった。

そしてその焦点となる場所は、疑いもなく中田瑞穂先生の居室(研究室)であったと言えるであろう。そしてその先生が、生活の基盤とされたのは西大畑のご住居であり、ご家庭であったことも疑いがない。

その中田先生のお部屋やご自宅に出入りした人々は皆、ほぼ80歳を越えられた現在、その中田瑞穂先生のお部屋を中心に、そこに出入りした一人であった私自身の経験を思い出されるままここに記録させて戴きたい。

2. 中田瑞穂先生の略年譜

中田瑞穂先生は、78歳の時、「脳と心」という薄い単行本を非売品として発行された。そのあとがきに、ごく短い略歴を載せられた。しかしそれ以外、詳細な履歴をご自分で記録されたことはなかったと思う。他方、先生が巨大に過ぎたためか、教職員が先生のことを書くなどということは、畏れ多いことと、誰一人先生のことを記録する者はなく、植木教授が中田先生の没後、追悼文に纏められた略歴^{5, 6)}以外は見当たらなかった。

ところが、先生が逝かれた17年後の1992年、

Brain Medical社から、シリーズ物の「日本の脳研究者達X」に中田瑞穂先生のことを記録して欲しいとの依頼を受け、私は植木先生による略歴を基本に、収集していた先生の記録を必死に整理し考え、先生の略歴として出版させてもらった¹²⁾。その後、折々に中田先生のことを、特に脳神経外科関係の諸先生に、述べた機会^{19, 20)}に、改訂してきたものをこのたび改めて取捨し、ここに先生の略年譜として挙げさせていただいた(表1)。

3. 中田瑞穂先生の居室(研究室)

A) 医学部全体の中での位置：(図1)

中田先生が、「脳外科研究施設長」を退職された昭和33(1958)年(65歳)頃を含む永年に亘る先生の居室(研究室)は、新潟医科大学、あるいは新潟大学医学部付属病院の木造平屋建て「外科病棟」の中央部にあった治療室の隣部屋であった。(臨床教室の研究室は、昭和42('67)~44年に、初めて一つの建物内に全臨床科の研究室が「研究棟」としてまとまるまでは、各教室の研究室はすべてそれぞれ、散在した各病棟の中に在った。)

先生の朝夕の足取りをまず見てみたい。朝、先生は医学部の正門(いわゆる赤門)に入られると(図2)、すぐ正面に現在も健在で、丈が高くならない低い黒松の木が、そしてその向こうに当時は壮大に思われたであろう2階建ての木造「本館」が見えた筈である。その2階中央に大講堂があり、入学試験も、卒業試験も、卒業式もすべての儀式はそこであった。その右方に医学部長室、左方に

表1：^{なかつみづほ}中田瑞穂 1893—1975年 略年譜

明治26(1893)年4月24日		島根県津和野にて中田和居(よしおり)第三男として出生
大正6(1917)年12月	(24歳)	東京帝国大学 医科大学卒業
大正7(1918)年1月		同大学 近藤次繁教授の外科に入局, 以後4年間副手, 助手
大正11(1922)年4月	(29歳)	新潟医科大学 外科教室助教授, 新潟医科大学付属医学専門部教授
大正13(1924)年12月	(31歳)	ドイツ(ハイデルベルク, E. Enderlen先生など), フランス, オーストリア, アメリカ合衆国に外科学研究のため出張
昭和2(1927)年5月		帰国
昭和2(1927)年6月	(34歳)	新潟医科大学 外科学教室 教授
昭和7(1932)年1月	(38歳)	最初の脳腫瘍(髄膜腫)手術(1月施行—5月退院)
昭和9(1934)年	(41歳)	(妻子夫人 逝去)
昭和11(1936)年5月	(43歳)	文部省在外研究員としてアメリカ合衆国(脳神経外科医H. Cushing, W. E. Dandy, P. Bailey先生など), ヨーロッパに出張 同年11月帰国
昭和12(1937)年		(日中戦争始まる)
昭和13(1938)年	(45歳)	「新潟神経学研究会」(現在の新潟脳神経研究会)発足 [あたたためよ 越後の酒も わろからず]
昭和16(1941)年	(48歳)	(太平洋戦争に突入)
昭和20(1945)年8月		(終戦)
昭和22(1947)年	(54歳)	「脳手術」 南山堂 第1版出版 [学問の 静かに雪の 降るは好き] (9月外科全病棟 類焼) (10月 昭和天皇 北陸ご巡幸の際ご進講/本館)
昭和23(1948)年5月	(55歳)	第48回 日本外科学会会長/新潟 第1回 脳外科研究会(後の日本脳神経外科学会)第1講堂で開催
昭和24(1949)年10月	(56歳)	「脳腫瘍」 南山堂 第1版出版 (新潟医科大学が新潟大学医学部と変わる)
昭和26(1951)年	(58歳)	第13回日本医学会総会特別講演:「日本における脳外科の現況」 (植木幸明助教授着任)
同年 12月		
昭和28(1953)年4月	(60歳)	還暦. 句集「刈上」を出版 (東大・医「脳研究施設」官制化) ワーレンベルグ症候群の発症 「私自身の体験した延髄発症の観察手記」書く
昭和30(1955)年の頃		大脳半球摘除術の第1例を行う
昭和31(1956)年4月	(63歳)	新潟大学医学部教授を定年退官 (自称 新潟大学脳研究室 設置 室長), 新潟大学名誉教授 (植木幸明教授 就任)
同年 同月		
同年 8月		
昭和32(1957)年4月	(64歳)	「新潟大学医学部付属脳外科研究施設」認可(施設長, 65歳退職) 「神経学随想」書く/新潟医誌71(3-10)
同年		
昭和33(1958)年10月	(65歳)	「外科今昔」 文光堂 出版

昭和35(1960)年	(67歳)	「私の父」書く/まはぎ31(12), 32(1)
昭和36(1961)年7月	(68歳)	「胎児(生)医学」書く/日本医事新報
同年 8月		「死の医学」書く/日本医事新報
同年 11月		紫綬褒章(脳外科学への貢献)
昭和41(1966)年9月	(73歳)	「癲癇2000年」連載/外科治療(日本てんかん協会1984年単行本として発行)
昭和42(1967)年4月		「新潟大学 脳研究所」に昇格
同年 11月	(74歳)	文化功労者
昭和43(1968)年5月		「ふたたび“死の医学”について」書く/Clinician
同年 10月		「時ということ」書く/芹
同年 11月	(75歳)	日本学士院会員、「甲羅に似せて穴を掘る」書く/長寿の体験→転載新潟医師会報
昭和46(1971)年2月	(77歳)	「脳のPlasticityなど」書く/神経進歩16(1)
同年 10月	(78歳)	「Neuro-Gliology」書く/新潟医誌85(10)
昭和47(1972)年	(78歳)	「脳と心」書き発行(非売)
昭和48(1973)年11月	(80歳)	「再び「脳と心」について」書く/新潟医誌87
昭和49(1974)年5月	(81歳)	「三たび脳と心」書く/新潟医誌88
昭和50(1975)年8月18日	(82歳)	「Otfrid Foerster…」書く/神経内科2(絶筆) 逝去
昭和51(1976)年3月		脳研究所 研究棟 落成
昭和52(1977)年		脳疾患標本センター設置 →1995 脳疾患解析センター →2002 〔統合脳機能研究センター 生命科学リソース研究センター〕〔バイオリソース研究部門 脳科学リソース研究部門〕
平成4(1992)年6月27日		生誕百年記念会、句碑建立
平成6(1994)年4月		(とめの夫人 逝去)
同年 11月19日		生誕碑建立/津和野

註)上記は 生田房弘, 日本の脳研究者たちX 中田瑞穂: Brain Medical 4(2): 240-246, 1992¹²⁾で要約した略歴を, 生田自身がその後, 折々に改変してきたもの。

は教授会室があり, それらすべての1階は事務部の各部屋であった。この建物を通過するには4段ほどの高い石の階段を上下する必要があった。

そこで中田先生も含め, 正門を入ったあと職員は, 皆本館の左(東)側にあった「奉安殿」と, 本館との間の狭い道, 今現在で見ると, 「脳疾患標本資源解析学分野」の前に立っている雄大なヒマラヤスギ(から松のように見える)のすぐ左側を通り, 本館の裏側に至った。

実は後に述べるように「脳外科研究施設」が認可

される一年前の昭和31年, この「奉安殿」が改造され, 自称「新潟大学脳研究室」は造られたので, ここが脳研究所の原点でもあった。そのヒマラヤスギは本館の最東南端にあった当時は小さな松のような木で(図2に松○とだけある), これ以降動かされていない。

さて本館の裏側から, 再び(図1), 赤門から直線的に南南西に真っ直ぐ伸びる通路に入り, まず左方の病理学教室への通路を過ぎ, 中央道路を直角に横切って直進し, 左側に, 高く有名な「医

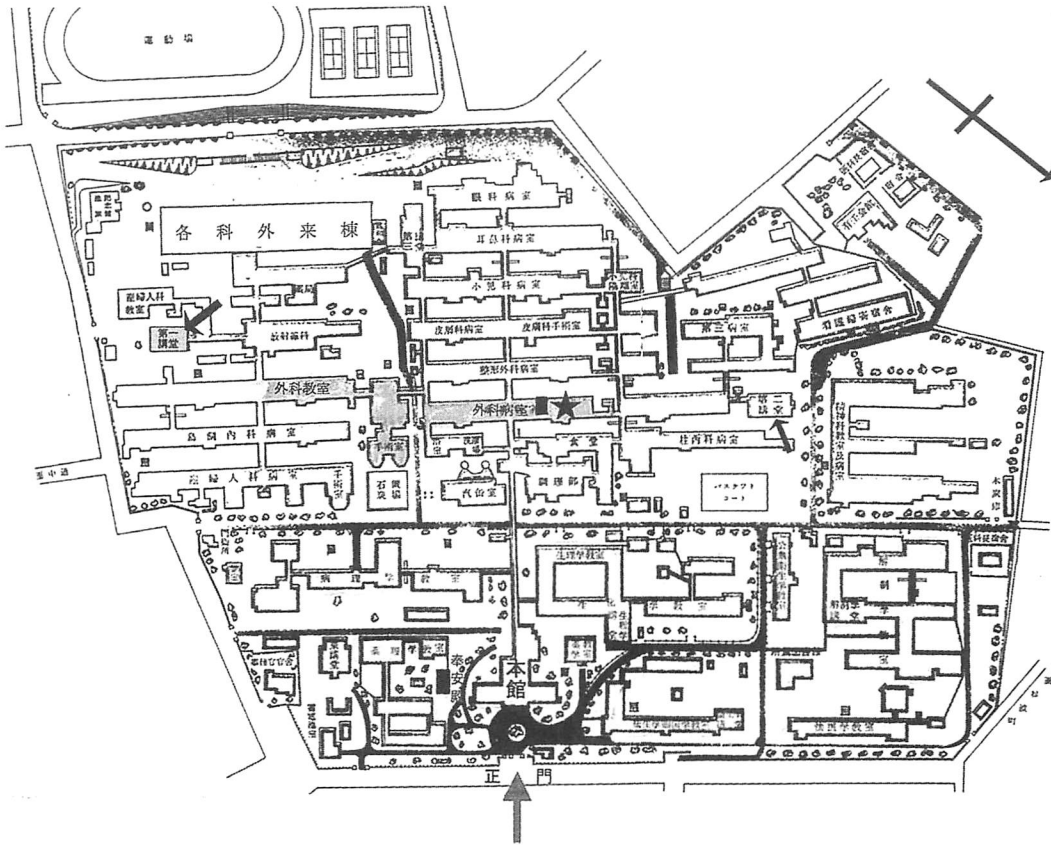


図1：新潟大学医学部と附属病院の昭31(1956)年当時の配置図。正門(赤門)や中田先生居室(★印)，第一，第二講堂(共に矢印)などが見える。昭27(1952)年の医学部図面を一部改変。

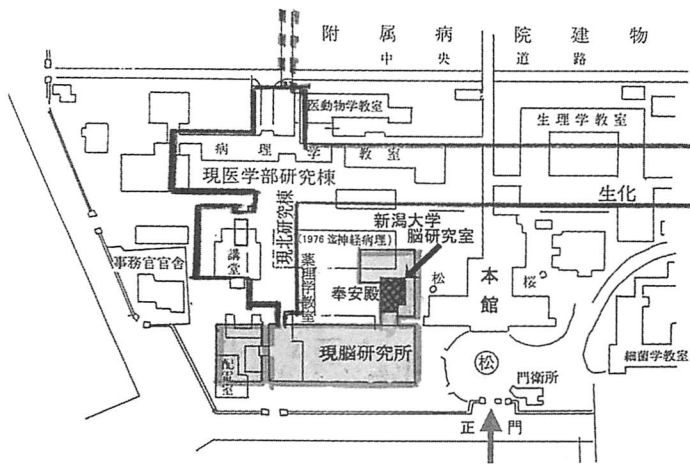


図2：昭31(1956)年当時の自称「新潟大学 脳研究室」と，自称でない脳研創立50周年の平成19(2007)年頃の脳研究棟群の位置関係。

大の煙突」2本がある汽缶室の脇を過ぎると、最初の病棟である外科病棟に入る。その直角に治療室(ナースステーション)がある。そこを右折すると、その治療室の隣が廊下の左側にある先生の居室(研究室)であった。

なお、この外科病棟に入って左方向にも外科病棟が続き、さらにその左方に外科教室が続いた。両者の中央部北側に独立した建物の外科手術場が造られ、固有の渡り廊下で続いていた。脳外科の手術が始められたのは手洗いをする前室の奥に造られ、タイル貼りの手術場に於いてであった。その一側の壁面には非常に大きく「静肅」と焼き付けられた文字板がはめ込まれていた。

B) 中田瑞穂先生居室(原室)の平面的配置など:

後にも触れたいが、室内における調度品などの配置は図3の如くであった¹⁸⁾。なお、先生の机に向かって左面の壁面には、先生の恩師である、東

大外科の近藤次繁(つぐしげ)先生の写真やそのレリーフがあり、また先生が脳手術を学ばれた H. Cushing先生や「中田先生へ」との直筆が入ったP. Baileyの写真、また 後年加えられたW. E. Dandyの写真、さらには手前に、当時はカードに一論文の要約を自分で書いて保存する以外に、コピーもなかった時代で、その文献カードを整理しておかれた木製の文献箱が、左方の壁面にあった。

すなわち、先生の机左の壁面に、師と仰ぐ諸先生の小さな肖像やレリーフが掛けられている他は、何の装飾もない。ただ見事に『清楚』とだけ言う他ない居室で、座禅堂を思わせもした。

ここで先生から様々な考え方を耳にし、この部屋を後にする時は、いつも「よし、やるぞ。」と思ったものであった。

これらの備品、机、椅子、テーブル等すべて、現在の中田記念室(註:当初の脳研究所棟内の)に

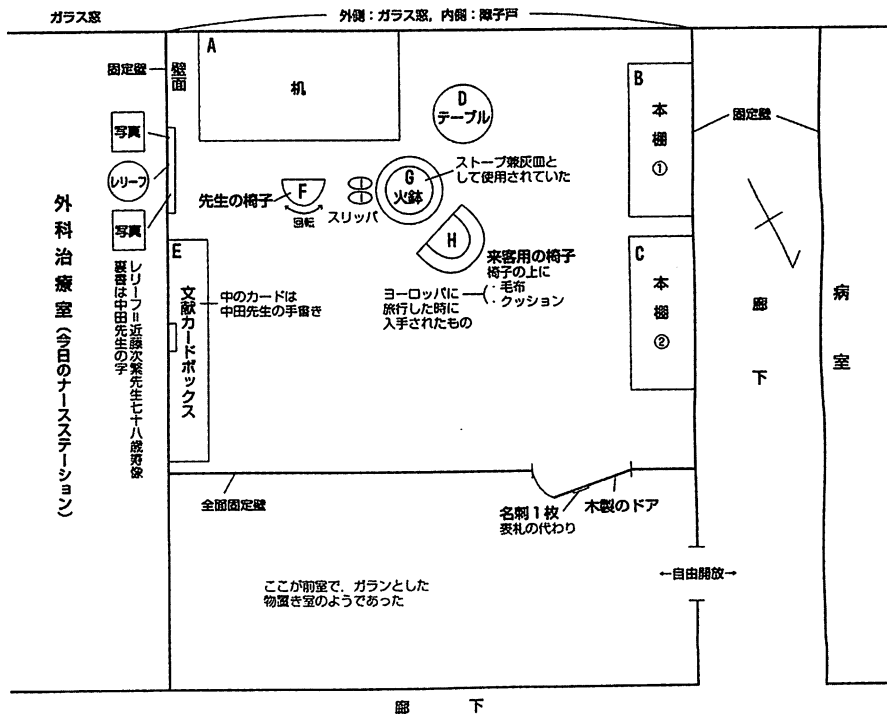


図3：中田瑞穂先生居室(研究室)：旧新潟大学医学部外科病棟内にあった原室内の配置図(昭30~44年頃)

保管されている。(但し、この中に混在するタイプライターとラジオは、どこかから迷入した物で、決して先生の部屋にあったものではない。)

誠に残念ながら、この部屋の写真を撮らせていただくことを申し出た先輩は一人もなく、私にも遂にお願いする勇気はなかった。結局一枚の写真も存在していない。やむなく、誠に稚拙極まるスケッチではあるが、私が当時の様子を可能なだけ思い出して描いてみたものが図4である。

4. 中田瑞穂先生の居室に私が思うこと

(以下の文は、新潟大学脳研究所創立50周年記念に学長裁量経費で、2007年3月、旭町学術資料展示館によって作られた「中田瑞穂記念室 所蔵品目録」¹⁸⁾に私が求めに応じて書き留めた文章で、発行者 橋本博文先生の許可を得て、ここに転載したものである。但し、註と図ナンバーは本稿で入れた。すなわち以下)

『外科学教室の教授であった中田先生のお部屋(研究室)は、当時の慣習で平屋建て木造の医学部の外科病棟の中にあった(図1, 3, 4)。

すなわち、外科病棟中央部の治療室(現在のナースルーム)に隣接し、おそらく個室の病室を改装

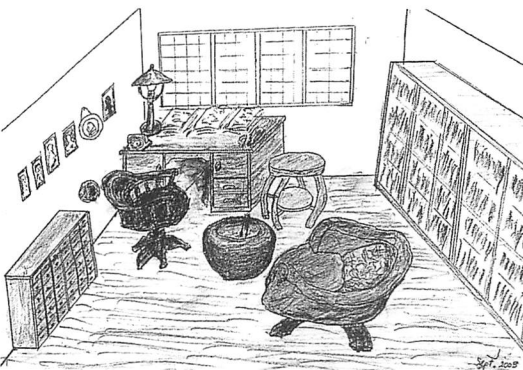


図4：中田瑞穂先生居室(研究室)(図3)：当時の想いと遺品でのモンタージュスケッチ(生田)。

した前室に入り、ドアを開けると、その居室が現れる。窓は陽当たりの良い南南西に面し、内側に障子戸が付けられていた。左奥に先生の本棚があり、その前に、先生の椅子、その右に濃紺の大きな火鉢が一つあり、これが当時の暖房であり、湯沸かし器であり、チェーンモーターでおられた先生の灰皿でもあった。

そして、その右手前ドア側に、刺繍のあるクッションが置かれ、布に包まれた肘掛けや背もたれ付きの立派な客用の椅子が一つ置いてあった。

右側壁には書棚があり、左側壁にはHarvey W. Cushingの写真と東大外科の恩師 近藤次繁先生の写真が貼られていたと記憶する。後年、先生の依頼でニューヨークの博物館でWalter E. Dandyの肖像を手に入れ、私は帰国した。それ以来、Cushingの高弟で、J. Hopkins大学のDandy先生のその肖像画が追加された。

部屋の左奥の机の向こう半分にはうず高く雑誌類が積まれ、先生は手前の僅かな空間で読み書きをされていた。左向こう角にドイツで求められたという銅製の電気スタンドが在った。

先生の秘書役は、外科の歴代婦長で、日に数回、清掃、火鉢の火、吸い殻、等々、その全ての仕事は婦長の誇りでもあったと思う。他方、この部屋の位置は医師達や病者への治療の指示にとっても最善の位置と思われた。

私が、この「外科教室」に入ったのは、一年間のインターン後、大学院第二期生として入局した1956(昭和31)年4月で、先生の大学院入試の諮問を受けたのもその部屋であった。

前室から、先生のお部屋に入るドアの中央には「中田瑞穂」とだけ印刷された、茶褐色に色褪せた先生の名刺が貼られていた。客用の立派な椅子に掛けるように言われても、緊張で、ほんの腰の一部をそこに置かせていただいたという感じであった。

先生のご退官はこの年の3月であったので、形

の上では先生のご退官と私の入局は同じ時期ということになる。将に末弟である。

しかし退官後も、先生は名誉教授室となったそこに毎日居られ、しかも一年後、後任の植木教授が J. Hopkins 大学に留学されたため、すべての教室業務や手術は先生が代行された。

他方、私は二年目、伊藤辰治教授の宿題報告のお手伝いに病理学教室に学内出張を命ぜられたが、先生の外来診察のカルテ書きだけは私にという、またとない幸運に恵まれた。

当時の教室の先輩達は皆、先生のお部屋に伺う時は、要件を最も簡潔に伝えるべく、幾たびとなく言葉を推敲し、思案の末ノックし、ドアを開くやいなや要件を述べ、一秒でも先生を煩わせる時間の少ないようにと、教室内の教育が行き渡っていた。中には、慌ててご指示を聞く前にドアを閉めてしまったなどという話も耳にした。

1960年、私がニューヨークの神経病理学の開拓者 H. M. Zimmerman 先生に師事すべく渡米したものの、語学や学問的未熟さに、ほとんど自分を情けなく思っていた頃、先生から丹念なお手紙を戴いた。その最後に、「男一疋、くよくよするな。」と書かれた後に、「虚子先生の句 時ものを 解決するや 春を待つ」とあった。その手紙も、あの机上で書かれた筈であった。

私は、4年間を過ごし帰国してからは脳外科を離れ、神経病理学だけを歩き始めていた。この頃から、先生の出勤は、月、水、金と隔日となった。しかし、なぜか先生は、私を良くお部屋に呼ばれては、引き留め、引き留め、様々なことを熱く語り続けてくださった。

1964年、私の帰国後は病理学におけるグリア細胞の態度を繰り返し問われた。やがて、今後の脳研究は、神経細胞だけでなく、グリア細胞をそれ以上に研究し、両者の関係を見て欲しいと、熱く語り続けられ、やがて1971(昭46, 10月)年、78歳で、新潟医誌にそと「Neuro-Gliology」と題する小

文³⁾を發表された。この先生の造語は今日有名な言葉となり、文科省はグリア細胞とニューロンの関係を特定領域研究に指定した。40年前の、世界に先駆ける慧眼であった。

先生はまた、科学にとって、自身の「観察」がいかに重要かを幾度となく説かれた。先生は脳神経外科の開拓者であると同時に、俳句は高浜虚子の高弟であり、実物そっくりの絵を描かれもした。ある時、「でも『観察』とは、何も科学にだけ重要なのではなく、俳句や文学にとっても、さらには絵やあらゆる芸術にとっても、まず、いかに真実を、現在の実態を正確に自分自身で『観察』し、それをいかに正しく表現するかにかかっている。その基礎をなすのはすべて自身の『観察』が正確であるか否かに尽きる。これこそがすべてに共通する礎石なのだ。」と語られたのも、この部屋であった。

また、それは先生がお亡くなりになられた1975(昭和50)年8月18日の、僅か4ヶ月前の4月25日のことであった。

朝、私を部屋に呼ばれ、自分に萬一の事があつたら、剖検での検索法はこのようにして欲しいと、昨日の誕生日に書かれたという、遺言とも言える押印の依頼書を私に渡された¹⁷⁾。

身の固まる想いで、そのお手紙を受け取ったのもその先生の部屋であった。

この前後であった。先生が机上の電気スタンドを「君にあげるよ。」と私に手渡して下さったのは。

今にして思えば、先生のお亡くなりになられる前年、私共脳研究所の教授会は中田先生のお部屋を、やや小さくなるけれど、出来るだけ現状のままを忠実に再現することだけを目標に、新築予定の研究棟内に、全部門が面積を持ち出し合って造ることとした。それが現在の「中田記念室」(註：研究棟内に当初造られた時の)となった。

先生がお亡くなりになった時、その新築工事は始まっており、翌1976(昭和51)年3月に落成した。

完成したその部屋に移し入れた机、火鉢、椅子などは、全て当時使われていたものであった。その後ややあって、当時の植木幸明所長(教授)に言われ、電気スタンドは先生の机の上に献上した。

思えば日本での、初めての系統立った脳外科も、脳手術も、この部屋で構想され、この机上で書き留められてきた筈である。「日本の脳神経外科学」の、そして「新潟大学脳研究所」発祥の部屋であり、机であると考えてよいと思う。

(2007年3月31日記)』



図5：中田瑞穂先生：54歳秋，昭22(1947)年10月、昭和天皇 北陸ご巡幸の際、脳外科についてご進講の直後[※]
(以下※印写真は、とめの奥様から恵与されたもの)

5. 新潟神経学研究会 (現在の新潟脳神経研究会)

現在の「新潟脳神経研究会」の前身、「新潟神経学研究会」第1回集会は昭和13(1938)年に発足して以来、連綿と今日まで70年余、例会に加え、多数の特別例会も重ね継続されている。そして、中田先生の記録によるその第一回集會から今日までのすべての記録は「新潟大学 脳研究所 図書室」に大切に保管されている。

第1回集會の記録を見ると、「昭和13年9月28日午後7時、第二講堂に於て第一回集會を行ふ」と書かれており、出席教授は、平澤 興(解剖)、鳥居恵二(耳鼻)、中田瑞穂(外科)、中山栄之助(婦人科)、赤崎兼義(病理)、木原玉汝(薬理)、柴田経一郎(内科)、中村隆治(精神)諸教授の氏だけが(順不同)として書かれている。「中田教授の開会の辞」として、「愚問を寄せられても少しも差し支えないもの。如何なる形式でやるか未定であるが、その大綱を決定したいと思う。」とある。

「名称」は中田先生の提案らしく「“神経学研究会”でもよいではないか？」に対し、柴田教授が「悪ければいつでも変更する。」で決定。

「会合」は中田教授が「隔月にやることにしては如何？」に、「皆々結構。」「第二水曜の午後7時。」

「会場：第一講堂でも第二講堂(図1)でも適宜やること。」「演題の件：前月の月末まで出すこと。演説時間：不定。大体はあらかじめ幹事に。」とある。

上記した教授の他、実に35名全員の氏名が記録されており、会費は一年50銭、学生は不要、「幹事：当分 小池上春芳(解剖)、上村忠雄(精神科)、田中憲二(外科)」の3先生の氏のみ記されている。[註：3名は当時皆助教授]。「懇親会を年一回やること、次回の演説は11月9日」と記された後、「第一回演説：癲癇の外科的療法 中田教授」のあとに、「最近に手術せる数例のFokal Epilepsie及びidiopathische Epilepsieに関して、その手術方法を述べ、特にそのFocus焦点と思わるる運動中枢の…」と書いてあり、最後に二重のカッコを付して、『皆少年の日の如き感激を覚え、久々の刺激をよるこび興奮した。今までのどの学会よりも面白かったという。』の文字で、第一回集會記録は締められている。

なお、第1回集會の9年後の昭22(1947)年、従って「脳手術」を出版された年の10月、昭和天皇の北陸ご巡幸があり、その折脳外科について先生が「本館」でご進講されたという(図5)。日本脳神経外科学会が始められる前年のことであった。

6. 第一回脳外科研究会 (後の日本脳神経外科学会)

昭和23(1948)年5月1(土)～3日(月), 先生が55歳となられた時, 第48回日本外科学会の会長を新潟(県政記念館)で務められた。その最終日の翌5月4日(火), 中田瑞穂先生は第1回脳外科研究会(後の日本脳神経外科学会)を第一講堂(図1)で主催し, 司会された。会長は名古屋の齋藤 真先生であったという。その講堂の位置は, 現在の市役所側(当時は県庁)からみた写真(図6)ではその最も右側の, 外来の右後の婦人科病棟の向こうに, 第一講堂の屋根が微かに見える。そこが日本に於ける「日本脳神経外科学会」発祥の地点である。

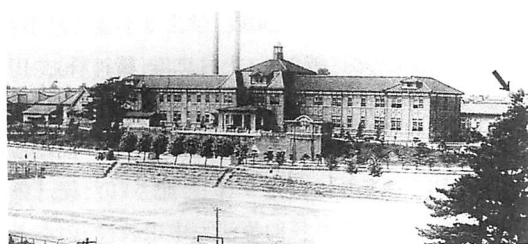


図6：昭26(1951)年当時までの新潟大学医学部外来棟と病棟群。[県庁(現市役所)3階から撮影] 第一回脳外科研究会は, 昭23(1948)年5月, この第一講堂(矢印)で行われた。そこは外来棟右端の産婦人科病棟の向こうにその屋根だけが見えるところ。後に手前の運動場やテニスコートの部に歯学部が建てられた。

7. 夜明け前¹⁵⁾

中田瑞穂先生が昭31(1956)年4月, 63歳で新潟大学医学部を定年退官されることを前もって承知されていた, 時の医学部長であり, 中田先生の方々の脳手術例の病理診断をされてきた病理学教室の伊藤辰治先生¹¹⁾は, 将来文部省から正式な認可を受けるための布石としての考えもあり, 第二次

大戦中, 天皇のお写真を安置するために造られ, 当時使用されなくなっていた鉄筋コンクリートの「奉安殿」に着目された(図2)。そして, 医学部内だけで決済できる学部内処置として, この上部を木造二階建てとし, 脳形態学, 脳化学そして脳生理学研究室を造り, これに自称「新潟大学 脳研究室」(註: 新潟大学医学部ではない。)の名を付された。将に将来に於ける新潟での神経学研究を見据えられての伊藤先生のずば抜けた卓見であり, 決断であったと言わねばならない。

その建物は, 旧本館講堂の最東端に位置していた(図7)。この左方本館の傍らに小さな松の木が見えるが, 現在もそのヒマラヤスギ(カラマツ様)は亭々として今もその場に聳えている。中田先生の退官と自称「新潟大学脳研究室」の誕生祝賀の記念講演会がその昭31(1956)年5月行われ, その直後, この研究室を背景に記念撮影がなされた(図8)。

果たせるかな, 翌昭32(1957)年春, この自称「新潟大学 脳研究室」を文部省は全く手を加えることなく, 「新潟大学医学部附属 脳外科研究施設」として認可し, 先生が初代施設長となられた。将



図7：自称「新潟大学 脳研究室」。現在の「脳疾患標本資源解析学分野」の処にあった旧「奉安殿」上に2階をあげ昭31(1956)年5月完成したもの。左端は旧本館の東端。その小さな松が現在のヒマラヤ杉そのもの。

新潟大学脳研究室

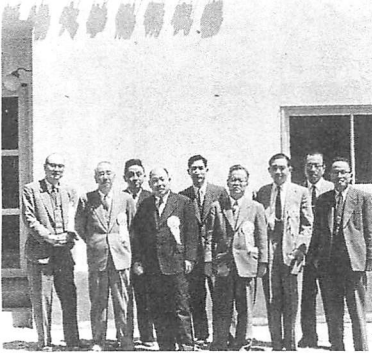


図8：中田先生の退官と自称「脳研究室」誕生祝の記念講演会のあと、脳研究室入口にて。前列左から、久留 勝(阪大)、中田瑞穂、平澤 興(京大)、荒木千里(京大)、清水健太郎代佐野圭司(東大)、右端が伊藤辰治の各先生。平澤、荒木両先生の間、後方に植木幸明先生。昭31(1956)年5月。



図9：伊藤辰治先生(1904-1985)78歳のとき。本邦初の脳腫瘍病理学者として中田先生の脳手術全例を病理学的に検討され、学部長として、また学長として、いつも中田先生の学問の場を蔭で整え、支え続けられた。(ご子息 伊藤勝也氏のご厚意による)

に、“新潟神経科学”の朝明けであった。

中田先生は、学部長など一切の管理業務は固辞され、ひたすら学問に没頭し切った生き方を貫かれた。しかし、これが可能であった蔭には、さきに触れた伊藤辰治先生(図9)¹¹⁾の大きな存在があったと思う。伊藤先生はいつも中田先生に、より良い場を提供すべく、学部長として、また学長として、卓絶した管理能力を以て対文部省を始め、あらゆる人々への蔭の努力を惜しまれなかった。このことは、新潟で神経学に携わる者が決して忘れてはならない歴史的事実であったと思う。そのことを中田先生は誰よりもよく知っておられ、伊藤先生の中田家元朝での席は、毎年奥座敷の“床柱前”(註：和室での最上位席)と決まっていた。

8. 西大畑の住居と先生の人間の一面

先生は、新潟に着任された大正11年以来、西大畑の借家を終生の住居とされた。

その場所(図10)は、南浜通りから海方向に向かう道路が、西大畑町の會津八一が寄寓し、伊藤辰



図10：西大畑の中田先生の住居と、大学の居室を結ぶ略図。当時、旧制新潟高等学校や新潟師範学校が左右にあった道、片道約1,200mを徒歩往復された。

治先生の自宅である北方文化博物館別館を右に過ぎ、左の新潟大神宮を通り過ぎ、これと直角に交差する道路を、日本海タワー方向に左折し、すぐ海側に入る最初の小路を20m程入った右側にあった。今は全く無い、一部二階付きの木造の平

屋が先生の借家であった(図11)。

先生は毎日、この住居を出て、やがて、右側に見える嘗ての旧制新潟高校(その後新潟大学教養部、そして現在は新潟大学付属中小学校に変わる)を過ぎ、次いで左側に新潟師範学校(その後新潟大学教育学部、現在は駐車場)を見下ろす道を進まれ、左折してすぐ医学部の正門(赤門)に辿り着かれる。凡そ片道1.2kmの道を往復されて居られた。

この借家の玄関口に入った真向かいには、塀越しに小さな中庭があった。すぐ左方に身を向けると玄関の引き戸があり、玄関に入った処に寄りつきの間があり、その右方に8畳ほどの客間があった。更にその右方に奥座敷があった。そしてそれらを通す縁側があり、その外に庭が見えた。主にこれらの2部屋が、教室員達が毎年、元日に奥様のご馳走目当てに集った客間であったが、それらの海側にも奥と手前の座敷、そしてお勝手とお風呂場が続いていた。いずれも和室や和式で、縁側の奥は小さな2階建ての部分に連なっていた。

ここでも、『すべてが清楚』の一語につきるたたずまいであった。

先生ご自身が75歳の時、「甲羅に似せて穴を掘る」²⁾と題した長寿に関するエッセイの中で、自分自身のことをこう述べておられる。

『60-65歳くらいまでは、どうかこうか再生能力、生命力があるので、多少の無理も通せた。しかし私のようなものには、停年後の10年余の自由が何よりも役に立ったと思う。無職だから、何者にも拘束をうけないで、自分の心身に最適と感ぜられることは勝手に規律として守り得る。社交が不得意であり、雑談が最も苦手だから、そのどれからも全く免れ得ていることは何物にも替えがたい幸である。ものに飽きることのない性格だから、退屈というものがない。

家は広く静かで、周囲に緑地広く、しかも交通に便利で、適当に庭も畑もあるから、充分に家に居て自然を楽しむ得る。こういう自分の性格を曲

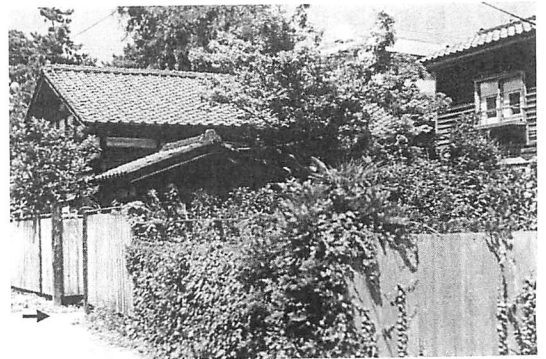


図11：中田先生の住居。昭50(1975)年8月18日当時。(小路から矢印方向に入り、すぐ左方に向くと玄関の引き戸があった。)

げないで思うままに暮らせる条件を全部そろえ得たこの幸運は私をいつしか人並みに健康な老人に仕上げたのだと思う。……。甲羅に似せて穴を掘った蟹のようなものと思えば、わがことながら可笑しい。』と結んで居られる(註：アンダーラインは筆者)。

なお、ついでに、こうも書いておられる。

『ものごとにくよくよせず、心配事もすぐ忘れるような楽天的な気持ちが健康によいことは解っていても、これは性格によってどうにもならぬものである。取越苦勞性、神経質の自分としては、心配ごとを忘れることは出来ないし、忘れようとすることが却って苦痛であるから、とことんまでくよくよ考え詰めることにしている。この方が性に合う。』

先生はこのように己を評価し、この借家について十分に幸せであり、足りておられることを知って居られた。

なお、その背景には先生の逝かれた直後に、無二の友 法医学の高野素十先生が、「鯛豆腐」⁹⁾と題する先生を偲ぶ言葉を「新潟外科同窓会誌」の中田先生追悼号で、『…。妻子(しげこ)さんが私の留守中、亡くなって次に、とめのさんが後添となったのであったが、これがまた実によく中田君に仕



図12：とめの奥様。平成4(1992)年6月，中田先生「生誕百年記念」祝賀会^{13, 14)}にて。

へて，私達はそばにいてうらやましいと思うことがたびたびであった。例えば、「もう猫柳が芽を出すころかな」と中田君がつぶやけば，早速町へ出て，猫柳を探し求めてくると言う様な，万事此の様な調子であった。…」と述べておられる。

実に献身的な，配慮に富んだ，適切な言動のとめの奥様の永年に亘る内助があつての先生の活力であつたのだとつくづく思う。

とめの奥様(図12)と話していると，中田先生と喋っているような錯覚を時々覚えたものであつた。

その時も，中田先生の往年の師，東大外科の近藤次繁先生のご子息 近藤駿四郎氏が新潟に越され，御二人の話が西大畑で大いに弾んでおられた時であつたという。その昭和13年当時は，秋田から贈られた酒を先生は好んでおられた頃という。途中で奥様が小声で「残念乍ら…」と告げられた時，先生が「新潟の酒(越乃寒梅)でもよい。」と，口にされた言葉がそのまま「あたためよ 越後の酒も わろからず」として生まれたのだと耳にした。

中田先生の後継者となられた植木幸明教授が，“中田先生の素顔を”と考えられ，プロの写真家に依頼して設営された席も，近藤駿四郎先生が新潟にお出でになられた昭和46(1971)年5月の「かき正」での座敷であつた(図13)という。この年78歳の先生はNeuro-Gliology³⁾を書かれた。



図13：中田瑞穂先生(78歳)の一面。昭和46(1971)年5月，近藤駿四郎先生の訪問を機に，「かき正」にて植木幸明先生と共に*。

また中田先生は，講義の中でも時々ユーモラスな表現で学生を魅了された。そうした先生の人間味溢れる面について，将にその学生講義を忠実に写生したような記録がある。今はない鶴岡の太田秋郎先生の「二冊のノート」¹⁰⁾と題された先生を偲ぶ追悼文である。時代は移り社会的背景も，治療法も異なり，今はその背景を読み直す必要もあるうと思われるが…。是非一読をと思う。

中田先生と話していると，東大の6年先輩で，三浦謹之助先生の神経学の流れを汲まれた名古屋大学内科の勝沼精蔵先生を，先生が如何に尊敬しておられたかを，良く感じさせられた。

他方，先生はいつも日本の将来の神経学を先導してくれる人は誰なのかにも思いを致しておられた。分野は問われなかった。神経解剖学の萬年 甫先生の，個々の神経細胞の連続切片を立体的に再構築するという，気の遠くなるようなお仕事⁸⁾や，神経内科学の豊倉康夫先生のユニークな考え方などについての言葉を本当に良く耳にした。

先生は停年後自由を得られてから，(表1)のように途絶えることなく執筆を続けられたが，「Otfried Foerster(1873-1941)—その劇的研究生涯の一面—」⁴⁾が絶筆となつた。

豊倉康夫先生によって発刊され，まだ歴史の新

しい「神経内科」誌に投稿されたその最終著者校正のゲラ印刷が、先生がお亡くなりになる年の4月、豊倉先生から送られてきた。そこには豊倉教授が予め書き込まれた厳密なカンマや数値の訂正がびっしり朱書されていた。これと共に豊倉康夫先生自身が中田瑞穂先生らによるWallenberg症候群の自己体験記録¹⁾について論じられ、神経内科誌第2巻第1号に載るはずの推敲完了の手書き原稿⁷⁾も一緒に送られて来た。その原稿はハードカバー表紙に「中田瑞穂様 恵存 一九七五年四月 豊倉康夫」と手記されており、その綴じ表紙の裏に中田先生は直筆で、「この原稿は豊倉教授の真摯な研学精神を目のあたりに偲ぶことが出来る貴重な原稿であるが、余生のない小生の手許で他の書類に紛れることを懼れ、これを脳研の保管下に置くように依頼した。昭和五十年四月 中田瑞穂」と書き込まれていた。

この4月25日の朝、先生の居室で、自身の剖検依頼書を私に手渡された¹⁷⁾あと、すぐそれらの印刷物も渡された。絶筆文の発行は5月となっているが、実際の発行は8月であったので、先生がその活字をご覧になられたのはこのゲラ印刷までであった。その綴は今「中田記念室」に保管されている。

(4月24日2010年記 於 新潟脳外科病院)

参考文献

中田先生による執筆は、停年後のものだけでも、表1にみられるように膨大な数となるため、ここでは本稿で引用した文献だけに留めさせていただいた。

- 1) 中田瑞穂：私自身の体験した一延髄発症の観察手記。新潟医誌, 67(9): 797-816, 1953(昭28, 9月)
- 2) 中田瑞穂：長寿の体験。日本国際医学協会編, 医・薬学の大家が語る長寿の体験。診断と治療社発行, 1968(昭43, 11月), 181-189頁。その後この全文にタイトル「甲羅に似せて穴を掘る」が附され転載：新潟県医師会報, 44(4): 8-10, 1969(昭44, 4月)
- 3) 中田瑞穂：Neuro-Giology。新潟医誌, 85(10): 667-668, 1971(昭46, 10月)
- 4) 中田瑞穂：Otfried Foerster(1873-1941)―その劇的研究生涯の一面―。神経内科, 2(5): 405-409, 1975(昭50, 5月)
- 5) 植木幸明：中田瑞穂先生のご逝去をいたむ。脳神経外科, 3(10): 812-813, 1975(昭50, 10月)。同題のNeurol Med Chir(Tokyo) 神経外科, 16(Ⅱ): 3-5, 1976(昭51, 1月)での略歴は同じ。
- 6) 植木幸明：中田瑞穂。Clinical Neuroscience, 2(12): 1522, 1984(昭59, 12月)[但し略歴なし]
- 7) 豊倉康夫：Gaspard Vieusseux(1810, 1817)と中田瑞穂(1953)によるWallenberg症候群の自己体験記録。神経内科, 2(1): 75-86, 1975(昭50, 1月)
- 8) Mannen H.: Morphological analysis of an individual neuron with Golgi's method. In Proceedings of Golgi Centennial Symposium. Edited by N. Santini, Raven, Press, N. Y., 1975. pp61-70.
- 9) 高野素十：鯛豆腐。新潟大学医学部外科同窓会誌, 創刊号: 1, 1976(昭51, 8月), 新潟大学医学部外科学同窓会
- 10) 太田秋郎：二冊のノート。新潟大学医学部外科同窓会誌, 創刊号: 58, 1976(昭51, 8月), 新潟大学医学部 外科学同窓会
- 11) 生田房弘：私の恩師―北から南から―伊藤辰治先生。臨床科学, 22(1): 117-122, 1986(昭61, 1月)
- 12) 生田房弘：日本の脳研究者たち X 中田瑞穂。Brain Medical, 4(2): 240-246, 1992(平4)
- 13) 生田房弘：中田瑞穂先生を偲ぶ集い。生誕百年。新潟大学医学部 学生会報58: 24-29, 1992(平4)
- 14) 生田房弘：中田瑞穂先生を偲ぶ集い。生誕百年。新潟大学医学部外科同窓会誌, 17号: 11-17, 1992(平4)
- 15) 生田房弘：脳研究所創立25周年。新大広報, 106号(平成4年度第2号): 1-3, 1992(平4, 10月)
- 16) 生田房弘：津和野町に有志が中田瑞穂先生生誕の碑を建立 生誕百年を記念して。新潟大学医学部外科同窓会誌, 20号: 11-14, 1995(平7)
- 17) 生田房弘：わが人生の師：父子二代にわたる自身の病理解剖依頼。文藝春秋, 80(16)特別版12月臨時増刊号: 220-221, 2002(平14, 12月)
- 18) 新潟大学脳研究所 中田瑞穂記念室所蔵品目録。新潟大学脳研究所創立50周年記念。新潟大学旭町学術資料展示館(館長 橋本博文)平成18年度学長裁量経費により作成・発行。2007(平19, 3月)
- 19) 生田房弘：新潟大学脳研究所創立50周年記念 中田みづほ展 講演会, 「新潟における脳研究の先達―中田瑞穂先生について」, 司会: 高橋 均, 9月29日, 2007(H19)年 / 有任記念館, 新潟。(DVD/脳研究所)。
- 20) 生田房弘：(財)日本脳神経財団特別講演会：日本における脳神経外科学の歴史-黎明期から現在に引き継がれる伝統と精神-「私のみた中田瑞穂先生について」, 司会: 寺本明, 座長: 高倉公朋, 10月11日, 2008年/パレスホテル ゴールデンルーム, 東京